

特別支援教育研究論文集

—平成30年度 特別支援教育研究助成事業—

研究協力：独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所

特別支援学校(聴覚障害)の
乳幼児教育相談における保護者支援
—「週の記録」に記述された母親の不安や疑問に焦点を当てて—

筑波大学附属聴覚特別支援学校

研究代表	吉野 賢吾	教諭
	鎌田ルリ子	教諭
	森 敬子	教諭
	杉山 砂寿	教諭
	土手 信	教諭
	佐藤 輝子	教諭
	桑原美和子	教諭

平成31年3月

公益財団法人 みずほ教育福祉財団

目 次

要旨	1
第1章 研究の背景	
1 特別支援学校（聴覚障害）における乳幼児教育相談	2
2 本校乳幼児教育相談で行っている支援	2
3 本校乳幼児教育相談で行っている「週の記録」を活用した支援	4
第2章 研究の目的と方法	
1 目的	8
2 方法	8
第3章 研究の結果	
1 記述の抽出	11
2 抽出した記述の検討	11
（1）項目別の検討	11
（2）支援を受けた期間別の検討	16
第4章 考察	
1 聴覚に障害がある乳幼児の母親は具体的にどのような不安や疑問をもつのか	18
（1）ことばの育ち	18
（2）兄弟姉妹とのかかわり	19
（3）保育所	21
（4）体の成長や遊び、生活	22
2 母親の不安や疑問は子どもの成長する過程のどのような時期に抱きやすいのか	23
（1）補聴器、人工内耳の装用習慣	23
（2）子どもの自己主張と「イヤイヤ期」	26
（3）ことばかけ	28
（4）ことばの理解と表出	30
3 子どもの聴力によって抱きやすい不安や疑問に違いがあるのか	32
4 子どもが装用する補聴機器によって違いがみえてくるのか	33
第5章 まとめと今後の課題	35
文献・参考 WE B サイト	37
謝辞	38

要 旨

本校の乳幼児教育相談では、聴覚に障害がある0歳から2歳の子どもと母親を中心とした保護者に対する支援を行っている。その保護者支援の一環として、「週の記録」を活用している。母親が一週間を振り返り、子どもの聞こえに関する気づきや一緒に遊んだ様子等を記入し、担当者に提出するものである。その「週の記録」の中には様々な記述があり、中には母親の不安や疑問が含まれた記述もある。

今回、本校の乳幼児教育相談で支援を受けている27組の2歳児の母子の中から、0歳の時期から通ってきている6組の母子を抽出し、その母親たちが提出した「週の記録」の中の不安や疑問が含まれた記述に焦点を当てて検討した。その結果、母親たちは「ことばの育ち」「兄弟姉妹のかかわり」「保育所」「体の成長、遊び、生活習慣」についての不安や疑問をもち、子どもの成長に応じて「補聴器や人工内耳の装用習慣」「自己主張」「イヤイヤ期」「ことばかけ」「ことばの理解と表出」についての不安や疑問をもっていることが明らかになった。また子どもの聴力によっては「手話」に関する迷いや疑問をもち、補聴機器に関しては「人工内耳手術」のことについて不安や疑問をもっていた。

本校の乳幼児教育相談では、そのような母親の不安や疑問に対して、担当者が「週の記録」にコメントを残し、場合によっては話し合うことで以下のような支援を行っている。

- ・「ことばの育ち」に対しては視覚的な補助手段を使いながら、子どもが母親に話しかけられたことが「わかる」経験を大切にすることを伝える。
- ・「兄弟姉妹のかかわり」では、母親が兄弟姉妹の気持ちも大切にしながらかわれるよう支える。
- ・「保育所」に関する支援では、担当者が保育所を訪問し、直接保育士らと話し合うことで、聴覚に障害がある子どものことについて共通理解できるようにしている。
- ・「体の成長、遊び、生活習慣」については、耳やことばの育ちの面だけではなく、子どもの全体的な成長を母親と一緒に支える。
- ・「補聴器や人工内耳の装用習慣」では、子どもに装用習慣が身につくまで根気強く母親を支える。
- ・「自己主張」「イヤイヤ期」に対する支援では、「こうしたい」「イヤだ」という気持ちを受け入れつつ、子どもの気持ちが切り替わるまで時間をかけてかわる必要があることを伝える。
- ・「ことばかけ」「ことばの理解と表出」については、その時その時の子どものことばの育ちを把握し、具体的なかわり方を伝える。
- ・「手話」については「ことばの育ち」の支援と同様に、視覚的な補助手段の大切さを伝える。
- ・「人工内耳手術」に関しては、母親の人工内耳に対する不安や疑問、迷いを受けとめ、母親の質問に答える形で話し合いを重ねる。

これらの支援の具体的な内容について検討したところ、本校の乳幼児教育相談の担当者は、母親たちが生活の中で自信と目的をもって子どもとかわることができるようになることをねらい、母親の気づきや不安、迷い、疑問を肯定的に受けとめ、認めながら支援を行っていることが確認できた。

キーワード：乳幼児教育相談 母親支援 週の記録 母親の不安や疑問

第1章 研究の背景

1 特別支援学校（聴覚障害）における乳幼児教育相談

聴覚に障害がある子どもの望ましい発達のためには、障害の早期発見と早期からの教育的支援が不可欠だといわれている。そのため、聴覚に障害がある子どもに対する早期教育の必要性は、言語習得という面からも早くから認識されてきた。聴覚障害者福祉協会（1979）が発行した「聾教育百年のあゆみ」によると、「附属聾学校（現筑波大学附属聴覚特別支援学校）でも昭和31年から3歳児学級を新設し、さらに昭和34年ころから1、2歳児の教育相談に力を注ぎ、昭和49年からは1、2歳児の学級を設け最早期教育としてその実践研究に努めている。このように昭和40年ころから全国の聾学校に教育相談部を設ける学校が多くなった。」¹⁾とある。このように、我が国の乳幼児教育相談には60年以上の歴史がある。

文部科学省（2016）が平成29年4月に告示した特別支援学校幼稚部教育要領の第1章総則の第6、特に留意する事項の4の（2）に、「聴覚障害者である幼児に対する教育を行う特別支援学校においては、早期からの教育相談との関連を図り、保有する聴覚や視覚的な情報などを十分に活用して言葉の習得と概念の形成を図る指導を進めること。また、言葉を用いて人との関わりを深めたり、日常生活に必要な知識を広げたりする態度や習慣を育てること。」²⁾とあり、特別支援学校（聴覚障害）における乳幼児教育相談の必要性が明記されている。

現在、新生児聴覚スクリーニング検査が普及し、全国で約9割の医療機関で検査が可能になり、出生児の約8割に実施されている。このことにより、生後2～3ヶ月ほどで難聴の診断を受けた子どもと保護者が特別支援学校（聴覚障害）の乳幼児教育相談で支援を受け始めるケースが増えてきている。このように、全国に乳幼児教育相談が広がっていった昭和40年代では考えられなかった0歳児からの支援が可能になり、より早期からの教育的支援ができるようになったことで、聴覚に障害がある子どもの望ましい発達がさらに期待できるようになったといえる。しかし、出産して間もなく我が子の難聴の疑いを告げられ、3ヶ月後には我が子が難聴であるという診断を受けとめる母親の精神的ショックは大きい。そのような母親を支え、子育てに前向きに取り組んでいけるように支援していくことが、乳幼児教育相談の担当者には要求される。そして、聴覚に障害がある子どもの言語を含めた全体的な発達を促すための支援を母子に行っていくことが必要となる。

2 本校乳幼児教育相談で行っている支援

本校の乳幼児教育相談（以下、本校乳幼）では、次のような具体目標を掲げている。

乳幼児教育相談（0～2歳児）の具体目標

- 1) 愛情と信頼感に基づいた、安定した親子関係を育てる。
- 2) 心身の健康や人間関係、基本的な生活習慣の育成等、子どもの全体的総合的発達を図る。
- 3) 子ども自身の主体的な聴覚学習を促す。
- 4) 1)～3)を基に、言語の獲得の素地をつくる。
- 5) 聴覚障害乳幼児の育て方について、両親の理解を深める。

本校乳幼では本校幼稚部の指導方針のもと、聴覚に障害がある子どもも、聞こえる子どもと同じような筋道をたどりつつ言葉を獲得していくと考え、聴覚と視覚を活用した話し言葉でのやりとりを目指した支援を行っている。医師から我が子が難聴であるという診断を受けた母親は、精神的に大きなショックを受けている。その母親は、難聴についての具体的なイメージをもてないことから、聞こえの程度はどれくらいなのか、どのように子どもとコミュニケーションをとればよいのか、特別な育て方が必要なのか、何か訓練が必要なのか、等の疑問をもつ。また、福祉制度や補聴機器に関する知識をもたないため、障害者手帳とは何か、医師の意見書とは何か、補聴器とはどのようなものか、人工内耳とは何か、特別支援学校（聴覚障害）とはどのような学校なのか、乳幼児教育相談とはどのようなところなのか、等の疑問をもち、戸惑いや迷いの中での子育てを始めることになる。そのような母親に対して、まず育児に前向きになるよう支援していくことが先決であると考え。母親が育児に前向きになるような支援を行いながら、聞こえに関する支援、かかわり方に関する支援、しつけに関する支援、言葉の獲得に関する支援等を同時に行っていくことが必要であると考え。

本校乳幼では、聴覚に障害がある子どもと母親に対して、主にグループ活動と個別指導を通して支援を行っている。0歳児と1歳児は週に1回、2歳児は週に2回のグループ活動を行っている。個別指導は月に1回程度設定している。個別指導は、1組の母子に対して1人の担当者が1学期間もしくは1年間継続して指導を担当している。グループ活動、個別指導の他に、保護者向け講座や補聴相談も行っている。講座としては年4回の母親講座、年1回の両親講座等を行っている。母親講座では、本校乳幼の教員が講師となり、「言葉」「聞こえ」「しつけ」「遊び」等のテーマに沿って、出席した母親たちの子育てにつながる情報を提供している。両親講座では両親が難聴の疑似体験をし、実際の自分の声の大きさを計測することで、子どもへのかかわり方の参考になる情報を提供している。補聴相談では、聴力測定や補聴器の調整を随時行うとともに、家庭での補聴器装用や補聴器の活用の仕方についての相談に応じている。

本校乳幼では年度末に文集を作成している。母親にこれまでの子育てについて書いていただいた原稿を集め、冊子にして配付している。すでに本校乳幼の指導期間を終えた母親のものになるが、その文集の記述の一部を紹介する。

～略～（本校乳幼に）通う前まではネット依存症のように調べまくり、子育てを楽しめず焦ってばかりでした。～略～なぜ泣いているのか、なぜ不機嫌なのか、なかなかわからずイライラしたりもどかしかったり落ち込んだりする事もありますが、疑問や悩みがあっても一人で抱え込まず、先生方や保護者の方々に相談でき、安心できる場所がある幸せを感じています。おかげで段々と子育てを楽しむことができるようになりました。～略～

～略～仕事をしながら療育をして行くにはどうすれば良いかととても悩んでいました。けれど、人工内耳手術をきっかけに自分の事ではなく〇〇の将来の事を考えていかなければいけないと改めて考えさせられました。

手術後なかなか言葉の出ない〇〇といて、不安な時に、けやきルーム（本校乳幼）の先生は「子どもに教えるのではなく母親と一緒に学んでいく事が大切、絶対に話せるようになるから」と言ってくれました。私はとても安心したのを覚えています。まだまだ何を言っているかわからない事も多いですが、今ではたくさん話をしてくれるようになりました。～略～

これらの記述にあるように、本校乳幼で支援を受けている母親は、徐々にではあるが育児に前向きに取り組むようになっていく。しかしその過程で母親は、子どもに補聴器の装用習慣が身につかないことを悩む時期や、子どもから言葉が出てこないことを気にする時期、子どもとの伝え合いに不安を感じる時期、子どものしつけに悩む時期等を経験する。グループ活動や個別指導の中で、担当者は実際に子どもと遊んだりかかわったりすることで、望ましい子どもとのかかわり方をモデルとして示し、いろいろな場面で母親と話し合う中でその悩みや不安に寄り添い、励まし、アドバイスしながら支援に取り組んでいる。

3 本校乳幼児教育相談で行っている「週の記録」を活用した支援

本校乳幼では母親一人一人に対して、「週の記録」のやりとりを通した支援を行っている。可能であれば毎週、無理のない範囲で、家庭での子どもの様子、母親が子どもとのかかわる上で心がけたこと等を「週の記録」の用紙（資料1参照）に記入して提出してもらっている。この「週の記録」には母親の迷いや不安、疑問等が記入されていることがあるため、それらに対して個別指導担当の教員がコメントを記入して返却している。「週の記録」に記入されている母親の不安や疑問を把握し、それに対して本校乳幼の教員がどのような支援を行っているのかについて整理することで、乳幼児教育相談において、子育てに不安を抱えている母親に対する支援のあり方について検討できるのではないかと考えた。

「週の記録」については、本校元教諭である今西・富田（1981）が母親の提出した記録をもとに母親支援について検討した報告をしており³⁾、この時期には既に母親の記録を活用した支援を行っていた。この報告の内容については後述する。愛甲（1989）は「0・1・2歳児の指導—お母さんへのテキスト—」の中で、母親に記録を提出してもらう目的について、「0～2歳児の指導は週1～2回である。この指導日に担当者が子どもの姿を的確に捉え、より良い発達の援助をするために母親に週及び月の記録を提出してもらっている。この記録は、担当者が家庭での子どもの姿を捉える手がかりとなると共に、①母親が子どもの姿を捉える・②母親自身が子どもへの関わりを見直す・③気になる事や困っている事等を整理する点でも意味がある。これらの記録をもとにして、グループ及び個別指導時に母親との話し合いを行う。」⁴⁾と述べている。当時母親に提出してもらっていた記録と、現在本校乳幼で活用している「週の記録」では様式は異なるが、活用する目的は同じである。

現在本校乳幼で活用している「週の記録」の用紙は資料1の通りである。用紙の左上段に「今週心がけたこと」、左中段に「聞こえの様子・補聴器について」、左下段に「連絡事項」、右側に「母子のやりとりや気づいたこと（遊びや生活の場面で）」、右下に「その他」と記入する欄を設けている。この用紙に母親が一週間を振り返り、子どもの聞こえに関する気づきや一緒に遊んだ様子等を記入する。そして登校時に本校乳幼の担当者まで提出してもらっている。一週間ごとの提出が望ましいが、個々の母親の事情もあるため、可能な範囲で提出するようお願いしている。

「週の記録」には聴覚に障害がある我が子の子育てに取り組む中で、子どもの成長を素直に喜ぶ内容、楽しい面白い出来事、母親の気持ち、不安、疑問、かかわりについての質問や葛藤等が記述される。母親の不安や疑問が書かれていた場合は、担当者はそれに対してできるだけ具体的なコメントや回答を赤のペンで記入し、丁寧に応じるように心がけている。また、母親の不安や疑問だけではなく、母親が意識して心がけたことや子どもとのかかわり等において、担当者が母親に伝えたいことがあった場合も記述を残している（資料2参照）。このようにコメントを記入した後にコピーをとり、そのコピーを個人ファイルに綴じ、原版を母親に返却している。

今西ら（1981）は「母親の悩みや困惑の内容を検討しながら、その背景にある、母親の障害の
とらえ方・子どもの見方について考え、この時期の母親は何を求め、どんな点に関心をもってい
るのかを見ていきたい。」として、2歳児の母親が提出した一年分の「一週間の記録」の中の質問
を整理検討した結果を報告している³⁾。ここで取り上げられている「一週間の記録」とは、今回
の研究で扱う「週の記録」と同様に母親が家庭で書いて提出するものであるが、現在の「週の記
録」とは様式が異なっており、「今週心がけたこと」「一週間の子どもの変化」「尋ねたいこと」「担
当者の記入欄」という項目が設定されている。今西ら（1981）は、「尋ねたいこと」に記された
ものを「聞こえ及び補聴器に関して」「ことばに関して」「生活習慣としつけに関して」等 19 のグ
ループに分けて整理した。その結果、「ことばに関して」の質問が最も多く、「聞こえと補聴器」
「自我の芽生えと反抗・母子関係」の順に多かった。このように母親からの質問を整理検討した
ことから、「担当者のもつべき姿勢」「指導内容」「指導形態」について考察している。「指導内容」
の中では以下のような考察をしている。

- ・（母親は）障害にとらわれる余りに、母親としてのごくあたりまえの姿が崩れ、自信を失っ
ているとも言えるだろう。
- ・障害の有無に拘らない子どもの姿や、障害によってひずんでいる部分もやがてはこう変わり
得ると今後の成長変化の見通しを伝えることも、母親の安定に有効だろう。
- ・母親自身が歩き出し実践する中で自分の目で確かめていけるように、暖かく見守り支え励ま
すのが担当者の役割だと考えたい。

佐藤（2014）は「週の記録」の母親の記述が短く単純な表現であった場合でも、今後の母子へ
の支援の方向の見極めにおいて、示唆深い内容が多いことを指摘している⁵⁾。そしてそれらの記
述に対する担当者のコメントと、補足のための直接的な口頭でのアドバイスを母親に行った事例
として一組の母子を取り上げ、実践を報告している。その報告によると、子どもの指さしについ
て、紙面でのコメントと口頭で補足して母親に伝えたところ、それがきっかけとなって母子の円
滑なコミュニケーションにつながったという内容であり、「週の記録」を活用した支援は、母親支
援の一つの取組として有効なものであることを示唆している。

本研究は、今西ら（1981）、佐藤（2014）の報告を参考にしながら進めることとした。

資料1「週の記録」用紙

週の記録

提出日	記入者	年	月	日
..	..	父	.	母

幼児氏名	年齢 (歳 ヶ月)
記録の期間: 月 日 () ~ 月 日 ()	
今回心付けたこと	
聞こえの様子・補聴器について	
連絡事項	

母子のやりとりや気づいたこと（遊びや生活の場面で）	その他
----------------------------------	------------

資料 2 「週の記録」の実際の記入例

週の記録		提出日： 年 月 日	
記入者： 父		母	
幼児氏名	年齢 (歳 ヶ月)	母子のやりとりや気づいたこと (遊びや生活の場面で)	
記録の期間： 月 日 () ~ 月 日 ()		首を振った！ お腹をたたいた！ のはいることと 真似て遊ぶと喜ぶ	
安眠 大きく表情を動かす		逆に私が先に首を振るとそれを見て真似すること もある	
スキップ		ハッハッ笑うのでとても楽しくて、二人で一緒に乗 しめこいる	
高熱発熱のタイミングで一緒に食事をとり 時間を共有する		自分で声にガゼをかけて、それを私が返して いはいはいばあをいって遊ぶと喜ぶ	
今週心がけたこと		とても楽しそうにガゼをかけて、ばあいと返して もらうのを待つ。という 今までは私がガゼをかけていたのに、成長を感じた おしり杖さでくるくる回に越えていた	
聞こえの様子・捕獲器について		くるくる回リながら重くのが楽しいようで、おしり杖 追いかけていき、また回して笑っている (道徳を教える) ころ 他のおもちゃでも私には思いつかない遊び方をすることがある	
連絡事項		その他 お母さんへお礼の言葉として、お母さんへお礼の言葉として、 お母さんへお礼の言葉として、お母さんへお礼の言葉として、	

第2章 研究の目的と方法

1 目的

本校乳幼では母親支援の一環として「週の記録」を活用している。その「週の記録」に書かれた記述から、聴覚に障害がある乳幼児の母親が、育児に取り組む過程で抱く不安や迷い、疑問等を把握する。そして、「週の記録」をもとに以下の4点について検討を行う。

- ①聴覚に障害がある乳幼児の母親は具体的にどのような不安や疑問をもつのか
- ②母親の不安や疑問は子どもの成長する過程のどのような時期に抱きやすいのか
- ③子どもの聴力によって抱きやすい不安や疑問に違いがあるのか
- ④子どもが装用する補聴機器によって違いがみえてくるのか

現在、本校乳幼においては先述の佐藤（2014）の取組と同様に「週の記録」を活用して、コメントと口頭での話し合いという形で母親たちに支援を行っている。本研究では複数の母子を取り上げ、母親の不安や疑問に対して、コミュニケーション面に限らず、聴覚補償、母子のかかわりの面等も含めて、本校乳幼の担当者が「週の記録」にコメントを残すことや、懇談等の場で母親と話し合うことで行っている支援の内容について整理する。そこから乳幼児教育相談における子育てに不安を抱いている母親に対する支援のあり方について検討する。

2 方法

（1）対象とする母子

本校乳幼の2歳児相談には平成30年7月現在、27組の母子が定期的支援を受けるために通っている。その母子の中から、以下の観点をもとに6組の母子を対象とする。

- ①子どもの年齢による支援内容の違い等について検討するため、0歳児から本校乳幼で支援を受けている母子を抽出する。抽出した子どもを誕生日の順にA児、B児、C児、D児、E児、F児と表記する。その母親についてはA児の母親、B児の母親、というように表記する。
- ②子どもの聴力による違いを検討するため、0歳児の時点で子どもが中等度難聴、高度難聴、重度難聴であった母子を抽出する。（中等度2組、高度1組、重度3組）
- ③子どもが装用している補聴機器による違いを検討するため、子どもが補聴器を装用している母子、及び子どもが人工内耳を装用している母子をそれぞれ同数ずつ抽出する。

今回抽出した子どもと母親について、「a. 初回相談時の年齢」「b. 支援開始時の年齢」「c. 新生児聴覚スクリーニング検査（を受けた結果）」「d. 支援開始時の聴力」「e. 補聴器装用開始時の年齢」「f. 人工内耳手術を受けた年齢」「g. 『週の記録』の枚数」「h. 母親の就労の有無」「i. 兄弟姉妹の有無」の項目を設定し、整理したものが表1である。各項目の説明を以下に記述する。

a. 初回相談時の年齢

新生児聴覚スクリーニング検査の普及により、生後間もなく難聴の疑いが指摘され、精密検査実施機関で確定診断を受けるケースが増えてきている。難聴と診断されると保護者は、精密検査実施機関の医師より聴覚に障害のある乳幼児に対する支援を行っている療育機関を紹介される。精密検査実施機関の医師より本校乳幼を紹介された保護者は、まず電話もしくはEメールで問い合わせをしてくる。その際、子どもと保護者が来校可能な日時を調整する。このような経過を経

て保護者と子どもが来校し、本校乳幼の担当者と初回相談を行う。この時の子どもの年齢を示している。

b. 支援開始時の年齢

保護者が本校乳幼での支援を希望し、受付を行った時点から「支援開始」となる。表1のように、今回抽出した母子は、子どもの年齢が0歳2ヶ月から0歳6ヶ月の時期に初回相談で来校し、0歳2ヶ月から0歳9ヶ月の時期に支援開始となったケースであった。

c. 新生児聴覚スクリーニング

今回抽出した子どものうち、6人中5人が新生児聴覚スクリーニング検査を受け、「refer（要再検）」と指摘され、精密検査実施機関で精密検査を受けたというケースであった。F児のみが「未受診」であったが、これはF児が生まれた産科が新生児聴覚スクリーニング検査を行っていないためである。母親はF児の兄2人を育てた経験から、F児の日頃の様子を見ていて難聴を疑い、自ら精密検査実施機関に行き診断を受け、本校乳幼を紹介された。

表1 対象幼児のプロフィール

	A児	B児	C児	D児	E児	F児
a. 初回相談時の年齢	0歳5ヶ月	0歳2ヶ月	0歳4ヶ月	0歳6ヶ月	0歳2ヶ月	0歳4ヶ月
b. 支援開始時の年齢	0歳6ヶ月	0歳2ヶ月	0歳6ヶ月	0歳9ヶ月	0歳3ヶ月	0歳6ヶ月
c. 新生児聴覚スクリーニング検査	refer	refer	refer	refer	refer	未受診
d. 支援開始時の聴力	COR 47dB	COR 102dB	COR 62dB	COR 102dB	ABR 90dB 無反応	COR 84dB
e. 補聴器装用開始時の年齢	0歳6ヶ月	0歳6ヶ月	0歳4ヶ月	0歳3ヶ月	0歳4ヶ月	0歳7ヶ月
f. 人工内耳手術を受けた年齢		右耳： 1歳11ヶ月			両耳： 1歳4ヶ月	右耳： 1歳10ヶ月
g. 「週の記録」の枚数	49枚	69枚	55枚	50枚	22枚	34枚
h. 母親の就労の有無	有	有	無	無	有	人工内耳手術時まで有
i. 兄弟姉妹の有無	1歳下の弟	2歳上の姉	5歳上の兄	2歳上の姉	無	7歳上の兄 4歳上の兄

d. 支援開始時の聴力

子どもが本校乳幼に紹介される前に、精密検査実施機関で行われた聴力検査の結果である。本校乳幼では継続的に聴力測定を行っている。その中で多少聴力の閾値に変動がある場合があるが、聴覚に障害があると診断された子どもの母親は、その診断が出された時の聴力の閾値や、精密検査実施機関の医師に言われた聴力レベルが70dB以上90dB未満の「高度難聴」とか、90dB以上の「重度難聴」という言葉が長い間頭の中に残っているようである。「週の記録」における母親の心情や悩みについて理解する上で、精密検査実施機関で難聴の診断を受けた際の聴力検査の結果を把握しておく必要があると考えた。そのため、「支援開始時の聴力」には精密検査実施機関で行われたCOR（条件詮索反応聴力検査）もしくは、ABR（自動聴性脳幹反応検査）の数値を記入した。

e. 補聴器装用開始時期の年齢

6人の子ども全員が0歳3ヶ月から0歳7ヶ月の間に補聴器の装用を開始していた。難聴と診断した精密検査実施機関で補聴器の装用を開始する場合と、本校乳幼で補聴器の装用を開始する場合がある。A児、C児、D児、E児は精密検査実施機関で装用を開始したケースであった。

f. 人工内耳手術を受けた年齢

B児、E児、F児が現在人工内耳を装用している。人工内耳の手術を受けた年齢については表1の通りである。B児、F児は片耳の手術であったが、E児は両耳同時の手術を受けた。

g. 「週の記録」の枚数

支援開始時から平成30年7月の第1週までに母親から担当者に提出された「週の記録」の枚数である。提出された枚数は22枚から69枚と母親によって差が見られた。

h. 母親の就労の有無

支援開始時に就労していた母親は4名であった。本校乳幼に通い始めた時期は育児休暇中であったが、A児、B児、E児の母親は現在、仕事を再開している。F児の母親は、育児休暇が終わって仕事を再開したが、F児の人工内耳の手術を機会に退職したというケースである。

i. 兄弟姉妹の有無

兄弟姉妹がいる子どもは6人中5人であった。兄・姉がいるケースは4人、弟がいるケースが1人であった。

(2) 記述の抽出

母親が提出した「週の記録」には、母親が記述したことに対して、担当者が意図的に支援が必要と考えてコメントしている。そのような母親の記述と担当者のコメントを、その時の子どもの年齢とともに抽出する。さらにその中から母親の迷いや不安、疑問が含まれる記述とそれに対する担当者のコメントを抽出する。

(3) 抽出した記述の分類

上記(2)で抽出された記述やコメントで内容が共通すると思われるものを項目として分類する。

(4) 分類した記述をもとにした、望ましい支援についての検討

上記(3)で分類した項目に「聞こえについて」「母親の子どもへのかかわりについて」等の項目をつける。これらの項目は予め決めておくのではなく、まとめられた内容をもとに本研究グループのスタッフで検討し、項目を決めることにする。

これらの記述の内容と数をもとに、以下の4点について検討する。

- ①聴覚に障害がある乳幼児の母親は具体的にどのような不安や疑問をもつのか
- ②母親の不安や疑問は子どもの成長する過程のどのような時期に抱きやすいのか
- ③子どもの聴力によって抱きやすい不安や疑問に違いがあるのか
- ④子どもが装用する補聴機器によって違いがみえてくるのか

そして、聴覚に障害がある乳幼児の母親が抱く不安や疑問に対して、本校乳幼で実践してきた支援の内容をもとに、乳幼児教育相談を担当する者が行える望ましい支援について検討する。

第3章 研究の結果

1 記述の抽出

6人の母親が提出した「週の記録」の中から抽出した記述の数は総計596個であった。

以後、「週の記録」から抽出した母親の記述と担当者のコメントを、記述されていた通りの文章で紹介していく。記述の中に子どもの名前が入っている、特定の名称が記されている等の場合は表記を変えることとする。また、乳幼児期は声も表情も身振りも手話も言葉も子どもにとっての「ことば」であると考え、そのため以下、表記を「ことば」とする。

抽出した記述の例

B児の母親の記述（0歳5ヶ月）

感情とともに声が出ていると思い、たくさん笑わせたり、母と表情豊かに接するようにしました。

担当者のコメント

お母さんとのやりとりがもっと大好きになりますね。豊かな表情は、お母さんの気持ちをわかりやすく伝える手段、素晴らしい手段ですね。

「週の記録」から抽出した記述の中には、下記のように母親が抱く不安や疑問、困り感等を含むものが見られた。そのような記述の数は、596個中141個であった。

母親の不安や疑問が含まれた記述の例

A児の母親の記述（1歳1ヶ月）

保育所から帰ると、私にベッタリくっついてきて、家事もなかなかできなくて困ります。側を離れたり、自分の思い通りにいかないと泣いたりして自己主張してきます。

担当者のコメント

大好きなママとずっと一緒にいたいのですね。自我が出てきました。これも成長です。

2 抽出した記述の検討

（1）項目別の検討

上記1で抽出された記述の中には、内容が類似したものが見られたため、それらを項目ごとに整理することにした。

「週の記録」の記述の中には、子どもの補聴器や人工内耳の装用や聞こえ等の「聴覚」に関する記述、生活の中での母親のことばかけや、子どもの話し言葉等の「ことば」に関する記述、母親の働きかけやそれに対する子どもの反応等の「かかわり」に関する記述、家庭での母子や兄弟姉妹との遊びの様子等の「遊び」に関する記述、生活習慣や身辺自立等の「生活」に関する記述、母親が気づいた子どもの体の動かし方等「体の成長」に関する記述、保育所での生活や、保育士からの質問等の「保育所」に関する記述が見られた。

以上のことから、「聴覚」「ことば」「かかわり」「遊び」「生活」「体の成長」「保育所」の7つの項目に分類することにした。以下、その記述例である。

「聴覚」に関する記述の例

C児の母親の記述（0歳8ヶ月）

家族での会話には反応あり。とくに「C児ちゃん」と呼ぶと見えない方向からでも振り向くようになった。

担当者のコメント

呼ばれると嬉しいことがあるから、振り向くのだと思います。C児ちゃんが振り向いたときにたくさん遊んであげているのですね。だから振り向くのです。家族みんながC児ちゃんをかわいがっていますね。

「ことば」に関する記述の例

B児の母親の記述（2歳11ヶ月）

「ごめんなさい。ごめんね」よりも、その後の「いーよー」の方が上手。自分があやまる時は、ニコニコしていたり、本当にごめんなさいの気持ちがあるのか疑問だが、自分がやられた時は、しきりに「ごめんなさい」することを要求するので、どういう時に言う言葉かは分かっているようです。

担当者のコメント

ごめんさないと言う、言わせる前に「〇〇だからいけなかったね」とか「〇〇は、かなしいね」など、こういう時、こんな理由、どうしてかを大切に、だから「ごめんなさい」だね。とやりとりしてあげて下さいね。

「かかわり」に関する記述の例

D児の母親の記述（0歳10ヶ月）

ハイハイの追いかけてこでは「来るぞ 来るぞ」と期待して待っている様子を見せます。その様子を見て少し間をおいて追いかけるようにして繰り返しやるのですがとても盛り上がります。

担当者のコメント

思いっきり楽しんでください。

「遊び」に関する記述の例

E児の母親の記述（0歳3ヶ月）

一人遊びの時間が放っておくとずいぶん長くなってしまいます。心がけて私と遊ぶ時間を長く持った方がいいのですよね？

担当者のコメント

一人遊びも大切な時間です。お母様がゆったりと関われる時と、E児ちゃんが一人で遊ぶ時と両方を大事にしていてくださいね。

「生活」に関する記述の例

C児の母親の記述（0歳11ヶ月）

食事をする際は、いすに座って食べさせるようにする。（いつも立って食べたりテレビがつけばなしなので）

担当者のコメント

立ち歩きをして注意されるのは、C児ちゃんにしても嬉しくはありません。まずは、立ち歩かない環境を整えてみるといいと思います。テレビ、食事量、ママと一緒にの食事など。

「体の成長」に関する記述

E児の母親の記述（0歳5ヶ月）

寝返りをうつようになりました。離れると寝返りをうって呼ぶ？探す？感じです。変化するものに興味を示して、自分からアタックします。

担当者のコメント

パチパチ！すごーいです。人の顔や表情を見るのが大好きですね。とてもいい成長です。

「保育所」に関する記述

F児の母親の記述（1歳2ヶ月）

保育所では（補聴器が）多少こわれても仕方ないので、なるべく音を聴かせて欲しいことを先生方に伝え、補聴器をつけるようにしてもらっています。たらいに入れた水遊びなどを行っているようでとてもたのしそうにしている、とのことでした。

担当者のコメント

補聴器をしていることで“参加”に制限が加わることは、決して望ましいことではありません。可能なかぎり環境を調整して同じように活動に参加できるようにしたいですね。

分類した項目の記述の数と、その中の母親が抱く不安や疑問が含まれた記述をカウントする。そのことで、母親が子どもと生活する中で意識を向けるところや不安や疑問をもつところに違いがあるのか検討することが可能になるのではないかと考えた。表2から表7の表中の数字は、分母が全体の数、分子が母親の不安や疑問が含まれた記述の数を示している。

表2 項目別の記述の数

	A児	B児	C児	D児	E児	F児	計
聴覚	3/10	21/41	12/26	9/14	7/18	10/30	62/139
ことば	7/16	5/46	3/30	4/52	9/25	3/16	31/185
かかわり	4/10	10/38	7/28	6/43	3/9	4/16	34/144
遊び	3/5	0/6	0/7	0/47	1/7	0/2	4/74
生活	0/3	0/1	0/2	4/10	0/3	1/4	5/23
体の成長	0/1	0/7	0/4	0/1	2/6		2/19
保育所		2/5				0/1	2/6
その他		0/3	0/1	0/1	1/1		1/6
計	17/45	38/147	22/98	23/168	23/69	18/69	141/596

注：表中の数字は、「母親の不安や疑問が含まれた記述/母親の記述数」を示す。

項目別の記述の数を見たところ、「ことば」に関する記述が185個と最も多く、次いで「かかわり」が144個、「聴覚」が139個であった。その中で、不安や疑問が含まれた記述141個のうち、「聴覚」が62個、「ことば」が31個、「かかわり」が34個であった。

「聴覚」の中には、母親の不安や疑問が含まれた記述が62個と最も多かった。その中には以下のように「補聴器」に関する不安や疑問、「人工内耳」に関する不安や疑問、「聞こえ」に関する不安や疑問の記述があった。それらを「補聴器」「人工内耳」「聞こえ」の3つの下位項目に分けて整理したものが表3である。

「補聴器」に関する母親の不安や疑問の記述例

C児の母親の記述（0歳7ヶ月）

補聴器をつけてもすぐにとってしまうことが多くなってきた。他に興味がいくように色々試したがうまくいかず、長くつけても5分くらいだった。

担当者のコメント

自我の育ちに伴い、補聴器の取りはずしも見られるようになります。グループの時に、こちらでも様子を見てみますね。

表3 「聴覚」の下位項目別の記述数

		A児	B児	C児	D児	E児	F児	計
聴覚	補聴器	2/4	9/18	8/19	6/9	2/4	7/18	34/72
	人工内耳		3/4		1/1	2/8	1/3	7/16
	聞こえ	1/6	9/19	4/7	2/4	3/6	2/9	21/51
計		3/10	21/41	12/26	9/14	7/18	10/30	62/139

注：表中の数字は、「母親の不安や疑問が含まれた記述/母親の記述数」を示す。

B児、E児、F児は本校乳幼で支援を受け始めた当初は補聴器を装着していたが、現在は人工内耳を装着している。「人工内耳」に関する母親の不安や疑問記述は7個と少ないが、内容を見ると母親の困り感が如実に表れているものが多かった。

「ことば」の記述の中にも母親の不安や疑問が含まれた記述が見られた。内容を見てみると、母親が生活の中で子どもに話しかける際の「ことばかけ」に関する記述、子どもの将来の話し言葉につながるであろう「声」に関する記述、母親の働きかけや話しかけに対して子どもがどのように理解しているかについて述べた「理解」に関する記述、子どもからの身振りや話し言葉での「表出」に関する記述、母親の「手話」に対する考え方に関する記述があった。母親によって、子どもとかかわる中で意識を向けるところや不安や疑問を感じるところに違いが見られるのかどうか検討するために、「ことばかけ」「声」「理解」「表出」「手話」の5つの下位項目に分けて検討することにした。「理解」の記述例を以下に記し、下位項目別の記述数について表4に示す。

「理解」に関する母親の不安や疑問の記述例

B児の母親の記述（2歳4ヶ月）

言葉（声）と手話、いろんなことばがでているB児も、先日声だけで「バック取って～」と言ったら取ってきてくれました。どれくらい理解できているのか、気になります。

担当者のコメント

理解できているかな？と思うお母さんの気付きがいいですね。日常生活の流れやその場の雰囲気ですでなんとなく行動出来ているところもあるかもしれません。まずは、「バック」を確認していくといいですね。もしまだ理解していなかったら、実際に使用する時にひとつひとつ丁寧に、お母さんが使い方を見せ、B児ちゃんに感じさせてあげてください。その時に、言葉も聞かせてあげるといいでしょう。

表4 「ことば」の下位項目別の記述数

		A児	B児	C児	D児	E児	F児	計
ことば	ことばかけ	1/5	1/12	1/7	2/14	1/5	2/8	8/51
	声	1/1	0/10	0/11	0/1	0/6		1/29
	理解	2/3	2/6	1/5	1/17	4/6	0/2	10/39
	表出	3/7	1/17	1/7	1/20	4/8	0/5	10/64
	手話		1/1				1/1	2/2
計		7/16	5/46	3/30	4/52	9/25	3/16	31/185

注：表中の数字は、「母親の不安や疑問が含まれた記述/母親の記述数」を示す。

「ことば」の下位項目別の記述数を見ると、「表出」に関する記述は64個であった。また「ことばかけ」に関する記述は51個であった。

「かかわり」に関する母親の不安や疑問が含まれる記述は34個であった。その中には「イヤイヤ期」に関する記述も含まれていた。その例を次に示す。

「イヤイヤ期」に関する母親の不安や疑問の記述例

C児の母親の記述（2歳7ヶ月）

イヤイヤが日に日にひどくなってきているように感じます。着替えや移動、お兄ちゃんとのケンカなど、どれ一つとしてスムーズにいきません。何が嫌なのか、どうしたいのか…私も自分に余裕がある時は「これが嫌なの？ あれがしたいの？」など優しい声掛けができるのですが、忙しい時にはついつい「もー！！」となってしまう反省を繰り返す日々です。

担当者のコメント

グループの懇談の時も話題にしましたが、まず、C児ちゃんが嫌と言っていると思われること…例えば着がえなら、「着替え、イヤだね！わかるよ！」と、一度イヤを受け入れてあげるところからスタートしましょう。その上で、「はだかんぼは……」「さむいのは……」など色々と気分を変えていけるよう誘ってみましょう。

このような「イヤイヤ期」に関する記述は、「かかわり」に関する母親の不安や疑問の記述 34 個中 11 個見られた。

（２）支援を受けた期間別の検討

書き出した全ての記述と母親の不安や疑問が含まれる記述を、本校乳幼で支援を受けた期間によって違いが見られるか検討するため、支援開始から6ヶ月ごとに区切って整理した。その結果は表5の通りである。

表5 支援開始から6ヶ月ごとにみた記述数

	A児	B児	C児	D児	E児	F児	計
開始～6カ月	1/3	10/39	8/60	6/39	6/11	3/23	34/175
7カ月～12カ月	3/9	8/33	8/18	5/41	3/17	6/21	33/139
13カ月～18カ月	3/6	11/36	3/10	7/52	5/15	6/12	35/131
19カ月～24カ月	5/17	5/23	3/10	5/36	7/22	3/13	28/121
25カ月～	5/10	4/16			2/4		11/30
計	17/45	38/147	22/98	23/168	23/69	18/69	141/596

注：表中の数字は、「母親の不安や疑問が含まれた記述/母親の記述数」を示す。

全体を見ると支援開始から6ヶ月までの期間の記述が175個あり、その後徐々に少なくなっていく。

さらに、支援を受ける期間に応じて、「聴覚」や「ことば」等の項目ごとに違いが見られるかどうか検討する必要があると考え、6ヶ月ごとの記述数を項目別にカウントしたものを表6のように整理した。

表6 「週の記録」の記述 6ヶ月ごとの記述数

	聴覚	ことば	かかわり	遊び	生活	体の成長	保育所	その他	計
開始～6カ月	24/55	2/42	5/46	1/16	0/3	1/10		1/3	34/175
7カ月～12カ月	19/39	4/42	9/31	0/19	0/1	1/4	0/2	0/1	33/139
13カ月～18カ月	12/22	8/41	10/38	1/19	2/5	0/2	2/3	0/1	35/131
19カ月～24カ月	5/19	11/47	7/24	2/18	3/9	0/2	0/1	0/1	28/121
25カ月～	2/4	6/13	3/5	0/2	0/5	0/1			11/30
計	62/139	31/185	34/144	4/74	5/23	2/19	2/6	1/6	141/596

注：表中の数字は、「母親の不安や疑問が含まれた記述/母親の記述数」を示す。

「聴覚」「かかわり」「体の成長」の項目の記述の数を見ると、支援を受ける期間が長くなるにつれて減少した。「ことば」についての記述の数は、支援を受ける期間に応じて変化は見られなかった。

「ことば」に関する母親の不安や疑問が含まれた記述は、支援開始から24ヶ月の間で徐々に増えている。支援を受ける期間に応じて、「ことば」の下位項目ごとに違いが見られるかどうか検討する必要があると考え、6ヶ月ごとの記述数を下位項目別にカウントしたものを表7のように整理した。

表7 「ことば」の下位項目別の6ヶ月ごとの記述数

	ことばかけ	声	理解	表出	手話	計
開始～6カ月	0/10	1/17	0/6	0/8	1/1	2/42
7カ月～12カ月	3/15	0/5	0/9	0/12	1/1	4/42
13カ月～18カ月	2/10	0/4	1/7	5/20		8/41
19カ月～24カ月	3/12	0/3	4/12	4/20		11/47
25カ月～	0/4		5/5	1/4		6/13
計	8/51	1/29	10/39	10/64	2/2	31/185

注：表中の数字は、「母親の不安や疑問が含まれた記述/母親の記述数」を示す。

「ことば」に関する不安や疑問が含まれた記述の数を見ると、「ことばかけ」に関する記述が7ヶ月から24ヶ月に、「理解」と「表出」に関する記述が13ヶ月以降に集中している。

第4章 考察

第3章では、「週の記録」における母親の記述を抽出し、項目に分け、支援開始からの期間に応じて記述数を整理した。本章ではその結果をもとに以下の4点について、実際に本校乳幼で行っている支援を踏まえ考察する。

- ①聴覚に障害がある乳幼児の母親は具体的にどのような不安や疑問をもつのか
- ②母親の不安や疑問は子どもの成長する過程のどのような時期に抱きやすいのか
- ③子どもの聴力によって抱きやすい不安や疑問に違いがあるのか
- ④子どもが装用する補聴機器によって違いがみえてくるのか

1 聴覚に障害がある乳幼児の母親は具体的にどのような不安や疑問をもつのか

(1) ことばの育ち

表2から、全ての記述を7つの項目に分けた際、「ことば」に関する記述が最も多く、今西ら(1981)の報告と同様の結果が示された。聴覚に障害がある子どもの場合、話し言葉の聞き取りにくさから言語獲得に大きなハンディキャップが生じる。それは母親も十分理解していることである。そのため毎日子どもと接する中で母親の意識は子どもの発する声や言葉に集中しやすい。それが今回書き出した記述のうち、「ことば」に関するものが185個あったことに表れているものとする。表6を見ると、「聴覚」「かかわり」「体の成長」は支援を受ける期間が長くなるにつれて記述の数が減少している一方、「ことば」については支援を受ける期間に応じて記述の数が変化する様子が見られなかった。このことから、母親は子どもの「ことば」に対して支援を受ける期間の長さにかかわらず、継続して意識を向けていることがうかがえる。

聴覚に障害のある子どものことばの獲得において、本校乳幼では子どもの「表出面」よりも「受容面」の育ちが大切であると考えている。話されてわかることばは後に自分で言えることばになっていく。話されたことばを確実に受けとめ、理解した上で行動する、応答するという姿を認め育てたいと考えている。そのため、子どもとやりとりをする際に担当者は子どもの「受容面」に意識を向けていることが多い。また母親と子どものやりとりに関する支援においても子どもの「受容面」を大切にしたいアドバイスや働きかけを意識して行っている。しかし表4を見ると、母親の記述では「理解」に関するもの39個に対し、「表出」に関するものが64個と多くなっている。これは聴覚に障害がある子どもの母親のほとんどが思う「早く話せるようになって欲しい」「もっと上手に話せるようになって欲しい」という気持ちが強いと、子どもの発声や発話に母親の意識が向いていることを示したものとする。また、話されたことを理解している様子よりも、声を出したりことばを発したりする姿の方が捉えやすいことも反映しているのかもしれない。このことから、子どものことばの成長において担当者の思いと母親の意識に差があることがうかがえる。今後、子どもの「受容面」の育ちや子どもが「理解」することの大切さについて、「週の記録」のコメントだけではなく、個別指導の中でより具体的にわかりやすく母親に伝えていくことが必要であるとする。また、子どもの「受容面」を大切にしている担当者の姿をモデルとして、グループ活動の中で子どもとかかわりながら示していく必要があるとする。

聴覚に障害がある乳幼児に話しかける際、写真カードや身振り、手話単語等の視覚的な補助手段を活用することは大切なことである。聴覚に障害がある乳幼児にとって、母親から話しかけられることばは、補聴器や人工内耳を通して聞き取りにくい、まだ頭の中の意味とつながってい

ない、等の理由から曖昧な情報となってしまう。そこで母親が話しかける際に見てわかる手段を補助的に使うことで情報が伝わりやすくなり、子どもも話しかけられたことがわかったことを実感しやすくなる。この子どもがわかったことを実感することが重要になる。本校乳幼では、母親から話しかけられたことがわかるという経験を積み重ねていくことで、母親から話しかけられることがわかることは当たり前、という感覚をもった子どもに育てたいと考えている。この感覚が育っている子どもは将来、母親や身近な大人から話しかけられたことがわからないという状況に接した際、怪訝な表情を浮かべたり、首を傾げたりする仕草をするようになる。その様子を見た大人は話しかけを子どもがわかっていないと判断し、再度話しかけたり、視覚的な補助手段を使ったりして子どもにわかるように配慮する。その結果、子どもは話しかけられたことを理解することになる。このことを本校乳幼の担当者は「わからないことがわかる」と表現して母親たちに伝えている。日頃母子で曖昧なやりとりをしていると「わからないことがわからない子ども」に育つ可能性がある。目の前の子どもを「わからないことがわかる子ども」に育て、そのことが聴覚に障害がありながら確実なコミュニケーションをする大人に育つことにつながることを伝え、話し言葉とともに積極的に視覚的な補助手段を活用することを母親たちに勧めている。そして視覚的な補助手段を担当者が実際に活用し、子どもがその情報を受け取っている姿を、母親にモデルとして示すように心がけている。

（２）兄弟姉妹とのかかわり

「かかわり」に関して、母親の不安や疑問が含まれた記述の中には、兄弟姉妹との関係について書かれたものがあった。

C児の母親の記述（１歳５ヶ月）

イヤイヤ期でお兄ちゃんとの物の取り合いでケンカすることが増えてきました。まずはC児のの気持ちに共感するよう心掛けていますが、お兄ちゃんもガマンばかりしていて、どう対応していいか悩む日々です。C児はお兄ちゃんにかみついたりします…。

担当者のコメント

C児ちゃんの気持ちに共感してからなら、C児ちゃんにガマンをお願いしたり、気をまぎらわせたりすることもOKだと思います。お兄ちゃんも成長していますし、ケンカしたりガマンしたりして、2人で仲良く大きくなってほしいですね。

D児の母親の記述（2歳5ヶ月）

姉の幼稚園の困りごと。幼稚園の帽子をD児がかぶりたがり姉に返せない。姉とバイバイする教室前で「帽子ねえねどうぞ」で意味は理解。・・・・・・自分ですんなり返したり、姉に無理やり取られたり、その時々で返し方も変わってしまうので統一した方が混乱せず、納得しやすいですか？今のところ自分ですと返せた後でもやっぱりほしくてしばらく泣いたりします。

担当者のコメント

グループの後の懇談でも話しましたが、D児ちゃんは色々と同じ合うことが増えているので、D児ちゃんが帽子をかぶった時に、「〇〇でかえすよ」「〇〇でおしまいだよ」など、自分で切り替えられるポイントを押さえてやりとりしておいてあげると良いかもしれません。かかわりの困ったー！は、かかわりの方法を変えてみて、あっそうか！を見つけられるチャンスです。何か変化があったり、やっぱりかわらないな・・・など、私にも教えてくださいね！一緒に考えていきましょう！

上記のC児とD児の母親の記述は、子どもの年齢や内容を見るとイヤイヤ期の姿が現れていると思われる。そのためD児の母親の記述に対して担当者は、母親のD児へのかかわり方についてのアドバイスをコメントとして残している。C児の母親の記述には兄とのかかわりについても書かれているため、担当者は二人の関係についてもコメントを残している。

聴覚に障害がある子どもと兄弟姉妹の関係について悩む母親は多い。イヤイヤ期の兄弟姉妹とのかかわりだけではなく、母親が聴覚に障害がある子どもとのかかわりを重視するあまり、兄や姉に我慢させているのではないかと心配したり、弟や妹が生まれたことがきっかけになり、聴覚に障害がある子どもが赤ちゃん返りをして困惑したりする様子も見られる。本校乳幼に兄弟姉妹と一緒に登校してくることが少ないため、担当者がかかわり方のモデルを示すことは難しい。そのため、グループ活動時の懇談や個別指導の際に母親から話を聞くという形で支援を行うことが多く、次のような話をしたり、コメントを書いたりするようにしている。

- ・兄や姉の気持ちも大切にすること。時には、聴覚に障害がある子どもが兄や姉に叱られたり泣かされたりしてもいいこと。
- ・兄や姉も母親に甘えたいという気持ちをもっている。例えば、一日の中で夕食後に兄や姉とスキップをとる時間を作る等の工夫をしてみることに。
- ・赤ちゃん返りは自分を見てほしいというサインの部分もある。弟や妹が昼寝をしている時等。聴覚に障害がある子どもにかかわれる時にじっくりかかわること。
- ・赤ちゃん返りは長期間続くことはないこと。
- ・家庭の中に母親は一人しかいないため、時間的にもかかわり方にも工夫が必要であること。

このようなことを母親たちに伝えるようにしている。アドバイスをするとするよりも、励ますという面が強い。

原島ら（2018）は、米国の聴覚口話法教育の実践研究校である CID（Central Institute for the Deaf）という聾学校を視察し、次のような報告をしている。「セントルイス周辺では、～中略～耳鼻科で診断を受け、聴覚障害が確定した場合は、保護者から CID に連絡がある。すると、CID の

スタッフがその家庭を訪問し相談業務を開始する。相談業務を家庭で行うメリットとして、母親に限らず父親、兄弟姉妹、祖父母等、その家族全員を支援の対象にすることができるという点が大きい。」⁶⁾ このような支援は数回継続されることが多いことである。我が国の乳幼児教育相談では、聴覚に障害がある子どもとその母親への支援が中心となっている。本校乳幼では個別指導や夏休み中の水遊びの際には兄弟姉妹の参加を認めており、機会があればかかわり方についてアドバイスしている。6月の父の日の近くでは2歳児のみ父親保育、9月の敬老の日の近くには祖父母懇談会を行っており、聴覚に障害がある子どもの家族全体に対する支援を行うという視点をもってとりこんでいる。しかし、それが家族支援として十分なものになっているか検討していく必要があると考える。

(3) 保育所

表2を見ると、「保育所」に関する記述の数は少なかった。母親の不安や疑問が含まれた記述はB児の母親から出されたもののみだった。

B児の母親の記述（1歳4ヶ月）

保育所ではやはり、お友達に通じないことがあると手が出てしまうことが多いようです。先生に一度近々面談をしましょうかと言われました。けやき（本校乳幼）でやっていることを教えてほしいと言われたのですが、何を伝えればいいのやら。

担当者のコメント

保育所側からママに相談があったのですね。けやきスタッフが園へ行き、おはなしをすることが可能です。こちらとしても園と連携を取りながら、一緒に子育てしていきたいです。園の先生に「けやきの先生が園へお電話してもいいですか？」と許可をとって頂ければ、電話がしやすいです。

上記の記述でのやりとりの後、実際に保育所と連絡を取り、本校乳幼の担当者が保育所を訪問し、園長や保育士と話し合いを行った。本校乳幼の場合、聴覚に障害がある子どもを初めて受け入れたという保育所が多い。そのため、保育所としても聴覚に障害がある乳幼児へのかかわり方、補聴器の扱い方等について情報を必要としているようである。このB児の母親の記述がきっかけとなって、本校乳幼の担当者と保育所の保育士らで具体的な話し合いができたことは、その後のB児の保育所生活において有意義なものになった。また保育士との面談において、本校乳幼での活動や子どものかかわり方について説明することに自信をもてなかった母親も、少しは安心できたものと思われる。精密検査実施機関で子どもが聴覚障害の診断を受け、本校乳幼を紹介されて支援を受け始めた時点では育児休暇中で、育児休暇の期間が終わると仕事に復帰する母親は多い。そのため、本校乳幼で支援を受けながら保育所に通っている子どもも多くなってきている。上記のB児の母親のように保育所でのトラブルや保育士からの質問等を、本校乳幼の担当者に伝えてくる母親も増えてくることが考えられる。保育所を本校乳幼の担当者が実際に訪問して保育士と話し合う、または本校乳幼の指導の様子を保育士が参観する、そして顔を見合わせて話し合い、情報交換するというような連携の機会が今後より必要となっていくものと考えられる。

（４）体の成長や遊び、生活

「体の成長」「遊び」「生活」に関して、母親の不安や疑問が含まれた記述がいくつか見られた。

E児の母親の記述（0歳3ヶ月）

首も座ってだいぶ安定してきたのですが、反ってしまいます。されるがままに反らせてあげていいのですか？

担当者のコメント

反り返りは多くの赤ちゃんが喜びます。今の時期だけだと思うので、楽しんで付き合ってくださいね。

A児の母親の記述（2歳5ヶ月）

レゴブロックを使って、道を作って車を走らせて遊んだりしましたが、それ以上遊びが広がりませんでした。

担当者のコメント

遊びに入り込んでしまうので、かわり遊びはやりにくいですね。ですが、遊びに集中し、没頭し一人の世界で遊ぶのも大切です。ただ、私たちとしては、色々な遊び方を側にいて提案する必要があるのではないのでしょうか。

D児の母親の記述（1歳10ヶ月）

歯磨きの時、舌をべーして、指でツンツン！好きで繰り返しべーとします。舌以外も刺激してみようとほほや歯・歯ぐきもツンツン！ニコニコして楽しいね～という表情でお互いいるのですが、歯ブラシに変わるとギャー（泣）！！！！

担当者のコメント

そうでしたか。それも触覚の課題です。ほっぺを膨らませるように触ったり、顔を中心としたわらべ歌遊びをするなどしてみましょう。歌を歌って歯磨きするのもいいかもしれませんね。口の中が敏感なのでしょうから。

E児は兄弟姉妹がいない。そのため母親はE児の体の動かし方や成長が気になっていたのかもしれない。A児はレゴブロック等に集中して遊ぶ傾向があるため、母親としてはやりとりができずに困惑したようである。D児のように歯みがきが苦手な子どもがいることを、担当者は経験上知っているが、母親はなぜ嫌がるのか理解できない様子である。聴覚に障害がある子どもに対して指導したり支援したりする場合、その障害から生じるコミュニケーションやことばの育ちという所に視線を向けがちになる。これは母親に限らず担当者も同様である。しかし、上記3つの記述のように、ことばやコミュニケーション以外のことについて聴覚に障害がある子どもの母親は不安を感じたり困惑したりする。そこに対して的確に支援を行う必要があると考える。体の動きが気になり、「このままでいいのかしら」と思いながら子どもとかかわるよりも、「これでいい

んだ」と思いながら子どもとかかわった方が、母親は笑顔で和やかに子どもと接することにつながるだろう。そのような支援を行うためには、我々担当者は聴覚に障害がある子どものコミュニケーションやことばの育ちに関する知識や情報だけでなく、子どもの心と身体の発達、基本的生活習慣の育ちについても知っておく必要があると考える。特別支援学校（聴覚障害）の乳幼児教育相談で支援を行う担当者は、目の前の子どもの耳やことばにだけ注目するのではなく、その子ども全体の成長を支えていくことが求められていると考える。

2 母親の不安や疑問は子どもの成長する過程のどのような時期に抱きやすいのか

表6の母親の不安や疑問が含まれた記述の数を見ると、「聴覚」に関する記述が支援開始から12ヶ月の間に多くなっている。ここには、「聞こえ」や「人工内耳」に関する記述ではなく、「補聴器」の装用やトラブルに関する記述が多く見られた。「補聴器」に関する不安や疑問の記述は全体で34個あった。第3章研究の結果において表は割愛したが、「補聴器」に関する不安や疑問を含む記述を集計したところ、支援開始から12ヶ月の間に30個と集中していた。「かかわり」に関する記述においては、支援を受けてから7ヶ月から18ヶ月の期間に記述が集中している。ここでは1歳児期特有の自己主張や、前述の「イヤイヤ期」に関する記述が多く見られた。「ことば」に関する記述は、支援を受ける期間が長くなるにつれて記述の数が増加していた。

（1）補聴器、人工内耳の装用習慣

表2を見ると、母親の不安や疑問が含まれた記述は「聴覚」に関する記述が最も多く、表3を見ると中でも「補聴器」に関するものに集中していた。表6を見ると、支援開始から12ヶ月の間に記述が多くなっていた。実際の記述には、次のような補聴器の装用に関して不安や疑問、困難さを感じている記述が多く見られた。

C児の母親の記述（0歳5ヶ月）

肌が弱いので顔や体に湿疹がしやすい。耳のところもかぶれているので、耳かけ式の補聴器がつけられるか心配。

担当者のコメント

赤ちゃんは肌が柔らかいので心配ですね。月齢がすすむと、もう少し肌の状態がよくなっていくと思いますが……。

B児の母親の記述（1歳1ヶ月）

耳掛けになってから、本当によく外すようになって困っています。以前のイヤホンタイプより、イヤモールドがぴったりはまる大きさで、こっちも入れる時にぐいぐい押し込む感じなので痛いかもしれません。対面から補聴器をつけようとしているのがわかると拒否。運良く着けられても速攻で外します。

担当者のコメント

誰もが通る道です。イヤモールドが新しくなると、感覚もつけ方も違和感を感じます。でも、そのうちに慣れますので、プレッシャーに感じず、淡々と着けてみてくださいね。そのうちに慣れますよ。

子どもが補聴器を装用することで、音や音声が子どもに届くようになり、ことばの獲得につながると考える母親は多い。確かにその通りであるが、インターネットの普及に伴い母親は「聴覚に障害がある子どもの場合、ことばの獲得のために早い時期からの補聴器の装用が望ましい」という情報を得ているため、補聴器の装用について焦燥感を感じている母親もいることを、懇談や個別指導の際に母親と話し合う中で担当者は感じている。このように、母親たちは子どもが装用している補聴器に意識を向けていることが多いため、表3で示されている通り補聴器に関する記述が多くなっていることにつながっていると思われる。

新生児聴覚スクリーニング後に精密検査実施機関で難聴の診断を受け、医師の指示のもと、生まれて初めて子どもは補聴器を装用する。母親にしても補聴器は生まれて初めて扱う機器になる。そのため、上記のC児の母親のように不安な気持ちや、疑問をもつことにつながるのであろう。担当者としては、このような母親の不安や素朴な疑問を確実に受けとめながら支援を行っていく必要があると考える。

上記のB児のように補聴器の装用を嫌がるケースは珍しいものではない。現在0歳児グループに通ってきている数人の母親が「週の記録」の中に補聴器の装用で苦慮している様子を記述している。また現在2歳児グループに通ってきている子どもの中に、2歳の誕生日を迎えてから難聴が発見された子どもがいるが、その子どもの母親も補聴器の装用で苦慮していることを「週の記録」の中に記述している。ほとんどの乳幼児が補聴器の装用を嫌がる、自分で外して口に入れてしまう、時には自分で分解してしまう等の行為をして、母親を困惑させる。一度このような困惑することがあった場合、母親はまた補聴器を外すのではないかと、また補聴器を口に入れるのではないかと補聴器ばかり見てしまうことにつながる場合がある。本来は子どもの顔を見て笑顔で話しかけ、一緒に遊ぶことが望ましいのだが、補聴器を装用している我が子を見るのではなく、我が子が装用している補聴器ばかり見てしまう母親になってしまうことがある。子どもは母親が見ているものを一緒に見たいと思うため、母親の視線の先の補聴器を自分で外して見ようとする。その補聴器を母親がつけようすると子どもが嫌がる。そのため、B児の母親の記述に対する担当者のコメントは、「プレッシャーに感じず、淡々とつけてみてください。」とアドバイスしている。担当者は補聴器を装用する習慣がつかないまま育っていった子どもはいないことを経験的に知っているため、「そのうちに慣れますよ。」ともコメントしている。「週の記録」の紙面の関係で長く詳しく書くことができないためこのようなコメントになっているが、個別指導の懇談の際に担当者は、「他の遊びに集中している時につけてみては?」「好きなテレビを見る時に補聴器をつけるよう誘ってみては?」等と具体的な生活場面を想定して、母親と一緒に対応を考えることが望ましいであろう。そして、補聴器ばかり気にかけるのではなく、補聴器を装用している子ども全体を母親が見られるよう、支援していく必要があると考える。また、子どもにとって補聴器の出力が強すぎて不快に感じている、もしくは弱すぎて効果を感じていないという場合も考えられる。生活の中での聞こえの様子や、聴力測定の結果等から補聴器の調整が必要であればできるだけ早く対応することが望ましいと考える。

B児の母親の記述（1歳2ヶ月）

ようやく耳掛けに慣れてきました。聞こえの様子としては変わっていない気がしますが、ずっとつけ続けられるようになったことが、とにかく嬉しいです。

上の記述は子どもに変化が見られて悩みや不安が解消されたことを母親が喜んでいる記述である。

子どもが補聴器をつけることを嫌がったり、拒否したりすることは母親にとっては大きな問題だったことがうかがえる。B児の場合は1ヶ月間で安定したが、補聴器を安定して装用するようになるまで、長い時間がかかる子どももいる。そのような子どもの母親を励まし続けることも支援の一つであると考える。

表3を見ると、「人工内耳」に関する母親の不安や疑問が含まれた記述が7個あった。この中にも、補聴器の装用を嫌がるのと同様に人工内耳の装用を嫌がるという内容の記述があった。

B児の母親の記述（3歳0ヶ月）：

家に帰ると人工内耳を外したがるのがたまにあります。家ではなくても困らない？か少々外で音を聞いて疲れたのかな？と思いますが、そんな時はB児の望むとおりにしています。

この記述からB児は人工内耳の装用が安定していることがうかがえる。家で外すということであるが、母親には困惑した様子は見られない。その時その時の子どもの成長に応じて、母親も心情に変化が芽生え、子どもへの見方やかかわり方が変わっていくということがうかがえる。

子どもが人工内耳をつけたがらない場合、かかわり方の工夫のみではなく、人工内耳の調整が必要な場合がある。刺激が強すぎたり弱すぎたりすることが影響していることも考えられる。しかし、人工内耳の調整は本校乳幼ではできないため、手術を行った耳鼻科の言語聴覚士にしてもらわなければならない。家での聞こえの様子や本校乳幼で行った聴力測定の結果、その子どもの声の出し方等を耳鼻科の言語聴覚士に伝え、調整の参考にしてもらうことで子どもの人工内耳の装用状況が改善される場合もある。このような医療機関との連携も積極的に行っていく必要があると考える。

子どもは1歳の誕生日を迎える頃になると自己主張が強くなってくる。これは聴覚に障害がある子どもも変わりはない。自己主張が強くなってくると子どもは補聴器や人工内耳をつけたくないという気持ちを体全体で表現することもある。補聴器や人工内耳の装用がうまく進まない母子の場合、母親は子どもの気持ちをくみ取りすぎるあまり、子どものつけたくないという気持ちを受け入れてしまいがち傾向がある。また子どもも母親に自分の気持ちを受け入れられることが当たり前と感じているため、母親が補聴器や人工内耳をつけさせようとすると当然のように拒否する様子が見られることもある。このような母子の場合、「週の記録」のコメントでの支援のみでは改善は難しい。個別指導の中で「子どもがイヤだと表出することは当然のこと。しかし、これから生活の中の様々な面でしつけを行っていかなければならないことを考えると、イヤでも我慢してもらうことも必要だと思う。」ということを母親に伝え、子どもの気持ちをくみ取りつつも少しずつ子どもに我慢させるようなかかわりができるように支援していく必要があると考える。また場合によっては、子どもが自分の気持ちを切り替えて補聴器や人工内耳を装用するまで時間をかけて担当者が子どもにかかわり、その様子を母親に見てもらうことも必要である。子どもが気持ちを切り替えて補聴器や人工内耳を装用している姿を母親が見ることで、自分の子どもも時間をかけてかかわれば母親のつけてほしいという気持ちが伝わるということを感じ、家庭でも取り組んでみようという姿勢につながることを期待して、担当者はかかわりのモデルを示すことが大切であると考える。

E児の母親の記述（2歳0ヶ月）：

3時間の攻防の末、E児があきらめて人工内耳をつけました。その日からつけて当たり前のものになったのか、終始つけるようになっています。

この記述は、それまで人工内耳の装用を拒否することが多かったE児に対して、母親が人工内耳を装用することを要求し、その要求をE児があきらめて応じるまで3時間かかったということを述べている。日頃の懇談や個別指導で担当者から話されたことを母親が実際に自宅で取り組んだ結果である。日頃我々は子どもの成長につながるアドバイスを母親に行っている。そのアドバイスを母親が受け入れて取り組むまで、時間がかかる場合もあるが、担当者は根気強く支援していくことが必要であると考えます。

（2）子どもの自己主張と「イヤイヤ期」

母親が抱く不安や疑問が含まれた記述で「聴覚」に次いで「かかわり」に関するものが34個と多かった。表6を見ると、支援開始から7ヶ月から18ヶ月の時期にやや多くなっているようである。この時期は子どもの年齢が1歳から2歳の頃に当たる。1歳頃になると子どもは、それまでは生活の全てのことを母親にやってもらっていたのが、少しずつ自分でやってみようと思ったり、自分はこうしたいと主張したりし始める。この変化に戸惑う母親は多いようである。

C児の母親の記述（1歳0ヶ月）

感情も豊かになり、お兄ちゃんが持っているおもちゃを貸してもらえないと床に頭をつけ泣いて怒り、おもちゃを貸してくれるまで泣き続けています…気の強い性格なのでしょうか…笑

担当者のコメント

難聴児であっても、心の成長は健聴児とかわりません。自我の芽生え、イヤイヤ期もきちんと経験していきます。〇〇ちゃんは、ママとのコミュニケーションができていますので、「イヤ！」と伝えるとわかってもらえる関係になっています。だからこそ、「イヤ」「もっと」「うれしい」「かなしい」といろいろな感情を表現することができ、そしてさらに心が成長していくのです。これからママが大変な時期になりますが、楽しみながら育児をしてくださいね。

D児の母親の記述（1歳0ヶ月）

やりたいこと＝だめなことを中断させるとのけぞって泣く、いやいやと首を横に振る意思表示ができました。

担当者のコメント

「イヤイヤ」の意思表示は大切です。自己主張ですから。全ての主張を認める事は難しいですから、時にはしっかり我慢してもらいましょう。

上記2つの記述はC児、D児ともに1歳0ヶ月の時の母親の記述である。子どもの「イヤ」「もっとやりたい」「貸してほしい」という気持ちを体全体で表す子どもの様子について述べられている。「イヤ」と自己主張して子どもが泣く時は、母親からすると少し困った状況である。それまで

は違う玩具を見せたり、場所を変えたりすることで子どもの気持ちが変わって機嫌がよくなっていたが、この時期の子どもは「自分はこうしたい!」という強い意志をもっているため気持ちを変えることが難しい。しかし、これは子どもが成長していくためのステップの一つであり、母親や大人がじっくりかかわることが必要な時期とも言える。そのため、担当者は子どもが自己主張する姿を肯定的に捉え、どのように対応したらよいのかアドバイスしたり、この姿が次にどのような姿につながっていくのかということをコメントしたりしている。母親からするとマイナスの印象をもってしまいがちな子どもの姿であるが、母親と一緒に肯定的に受けとめ、よりよいかわりにつなげていくことが必要であると考え。

2歳児の頃は、「魔の2歳児」や「イヤイヤ期の始まりの時期」等と言われており、母親たちが子どもとのかかわりで苦慮することが多くなる時期である。

F児の母親の記述（1歳8ヶ月）

また、イヤイヤをするようになってきました。健聴の子でも、この時期うまく自分の思いを伝えられずイライラするのに、F児はどうなるんだろうか・・・と悩んでしまいます。

担当者のコメント

イヤイヤは子どもが自立するための大切な道のりです。お母さんの言うとおりにほしくないという自我の主張でもあります。気持ちを受けとめ言語化する。こちらの言い分を伝える。そして受け入れられるまで付き合い、受け入れられたらほめる。まさにコミュニケーションのチャンスです。

A児の母親の記述（2歳0ヶ月）

今はイヤイヤ期なのかなと思うのですが、「イヤ」とはあまり言わず、自分の主張が通らないと泣いて訴えてくることが多いです。私が用事している時に遊んでほしくて「おいで～」と言ってくるのですが、行かないと泣きます。最近は、「用事終わったら行くね」と声をかけると待ってくれる時もありますが、私が行くまで「おいで～」と泣きながら言ってきます。

担当者のコメント

気持ちの言語化を心がけてみましょう。つまり、A児くんが思っていることもお母さんが言葉に変えて下さい。例えば、「ママー、遊んで、なの?」「ママー、来てー、なの?」です。すると、ママは、二人分を話すということですね。いかがでしょう。

上記のF児とA児の母親の記述は、イヤイヤ期の子どもの様子が現れているものと思われる。子どもの様子を見て母親は不安を感じながら対応に苦慮している様子がうかがえる。この母親の記述に対して担当者は子どもの気持ちを言語化することを提案している。聴覚障害の有無にかかわらず、この時期の子どもはまだ自分の気持ちや考えを相手に伝えることが難しい。その気持ちや考えを母親がことばにして言うことで、子どもは母親が自分の気持ちをわかってくれていると感じ、安心する。このようなかわりを繰り返していくことで、子どもはその時の自分の気持ちや考えに合ったことばで伝えるようになっていく。これは簡単に身につけられるものではなく根気の必要なかわりであり、長い期間継続することが大切になる。そのため、子どものイヤイヤ

もコミュニケーションのチャンスであるというコメントを残し、母親が前向きに子どもにかかわるよう励ましているものと考ええる。

本校乳幼では、0歳児、1歳児、2歳児と全ての年齢のグループ活動の終わりに懇談を行っている。懇談では、その日の活動のねらいやその活動の中の子どもの様子等について担当者が話し、母親一人一人から活動の感想や家での子どもの様子について発言してもらっている。イヤイヤ期の子どもとのかかわり方については、1歳児と2歳児のグループ活動後の懇談の時間に話題になることが多い。一人の母親が子どものイヤイヤに関する話をすると、他の母親も同様の発言をする様子が多々見られる。このことにより、イヤイヤ期特有の自己主張をしているのは我が子だけではなく、イヤイヤ期の子どもとのかかわりで困惑しているのは自分だけではないと母親たちは感じ、少し安心するようである。母親たちの話を受け、担当者はイヤイヤ期の子どもへのかかわり方について次のように説明している。

- ・子どもの気持ちや考えを言葉にして母親が代弁することで、子どもは自分の気持ちや考えをわかってもらえたと思うこと。
- ・その上で、我慢させるところは我慢させ、やらせることはしっかりやらせるようにすること。
- ・聴覚に障害があるためわからないのではない。母親が伝えようとしている「やってはいけない」「がまんしてほしい」ということを、子どもはわかっている。
- ・しかし子どもは泣いて訴えてくるだろう。でも子どもは母親が自分に何を要求しているのかわかるため泣いている。
- ・子どもは泣きながら自分の気持ちを切り替えようとしている。子どもが「お母さんがダメって言っているから仕方ないか」と気持ちを切り替えられるまでには時間がかかる。その時間を最後まで子どもに付き合っただけであることが大切であること。

これらのことを家庭での子どもの姿に照らし合わせながら説明している。この際担当者として気をつけていることは、子どもに我慢させた方がよいということを担当者が判断するのではなく、母親が我慢させたいと考えているかどうか確認することである。育児の主体は保護者、特に母親であると考え。母親が本当に子どもに我慢させたいと考えていることに沿って支援していくことが大切であると考えている。

（３）ことばかけ

「かかわり」に次いで、母親の不安や疑問が含まれた記述が多かったのが「ことば」に関するものであった。表6では「ことば」に関する記述は支援開始後6ヶ月ごとに見ても数に大きな変動はない。このことから、成長するにつれて子どもとのかかわり方が変わってきても、「ことば」に対して母親は常に意識しているということがうかがえる。「ことば」に関する不安や疑問が含まれた記述では「理解」「表出」についての記述が多いことが表4に示されている。表6を見ると母親の不安や疑問が含まれた記述は、支援開始後徐々に増加している。表7を見ると、「ことばかけ」に関する記述が7ヶ月から24ヶ月に、「理解」と「表出」に関する記述が13ヶ月以降に集中していることがわかる。7ヶ月頃から「ことばかけ」に関する記述が書かれ始めるのは、母親のことばかけや働きかけに対して子どもの明確な反応が得られるようになる時期と重なっているためかもしれない。また、「理解」と「表出」に関する記述が支援開始後13ヶ月以降に集中しているということは、母親とのことばでのやりとりを楽しめるようになる時期と重なっているためであると考え。まず、母親の不安と疑問が含まれた「ことばかけ」に関する記述を次に示し、必要な支援について検討する。

C児の母親の記述（1歳3ヶ月）

お米を研ぐ際に「シャカシャカ」と言ったら、C児は歯みがきをするジェスチャーをした。シャカシャカ＝歯みがきという事を理解していると思うと嬉しかったです。その反面、「シャカシャカ」という音だけでも色々な意味があるので、どのようにすれば伝わるのか考えてしまいました…。とりあえず「歯みがきもシャカシャカだねー。お米もシャカシャカだよ」と米を研ぐジェスチャーをしてみました。

担当者のコメント

すばらしい対応です！！「あれはシャカシャカ、これもシャカシャカ」は、感覚で学んでいきます。説明してわかるものではありません。いろいろな生活経験が知識になっていきますよ。

聴覚に障害がある子どもの年齢が低い頃は、このC児の母親のようなオノマトペや身振りを活用したことばかけが大切である。身振りを含む視覚的な補助手段を使って話しかけることに関する支援については先に述べた。聴覚に障害がある乳幼児は、大人から長い文で話しかけられてもその話を受容し、理解することは難しい。そのため子どもに話しかける時には、子どもが受容しやすいように、リズムを意識し、繰り返し話しかけるように心がける必要がある。本校乳幼の担当者は、グループ活動の場面に限らず個別指導の場面においても子どもに話しかける際にオノマトペを多用している。「アムアム（食べる）」「ジャブジャブ（手を洗う）」等のように、音や動きを表すことばを繰り返し使っている。このような姿を活動の中で母親にモデルとして示し、実際に子どもに伝わっているところを見てもらうようにしている。そして上記のように「週の記録」のコメントにおいても母親に対して生活の中でのオノマトペの活用を促している。

子どもの年齢が高くなると母親の記述の内容も次のように変わってくる。

A児の母親の記述（3歳2ヶ月）

いつも、朝ご飯を食べている時、A児が「今日は？」と聞くので「今日は、A児と弟は保育園に行くよ。ママは学校（母親講座）に一人で行くよ。」と言って、「A児と弟は一緒に保育園だよ。」と伝えて、分かったかなと思っていました。その日の夜、寝る前にA児が「今日、保育園行っただの。」と言うので、いつものように何して遊んだか聞いて、「おさんぽ行っただの。」等、会話した後、A児が「ママはお仕事だったの？」と聞いてきました。朝、学校行くと伝えてたはずなのになと思いつつも「ママは学校にいつてきたよ。」と答えました。

担当者のコメント

A児くんの「今日は？」に対して、お母さんが「今日は、なに？」と聞いてあげたり、「今日は、保育園（に）行く？ なに？」と、A児くんが質問したいことを文で聞かせてあげたりすると良いです。

「今日は、A児と弟は保育園に行くよ。ママは学校に一人で行くよ。A児と弟は一緒に保育園だよ。」の部分は、「A児は保育園に行くよ。」「弟も保育園に行くよ。」「ママは学校に行くよ。」と、文を分けて一つ一つA児くんに伝えると良いかと思います。

A児の母親の記述の内容を見ると子どもの理解について考えているようだが、担当者のコメントがことばのかけ方になっているため「ことばかけ」に含めた記述である。年齢が上がるにつれて、話し言葉でのことばかけが増えてくる。しかし、母親のことばかけが全て子どもに伝わるわけではない。担当者は子どもが将来、子どもが母親のことばかけを理解した上で応じるようになるためのアドバイスをしている。ある意味ことばかけのテクニックのようなアドバイスに見えるが、このようなアドバイスが有効な母親もいるため、その母親の個性に応じたコメントが必要になるところである。

ことばかけやかかわり方について具体的にコメントを残すことがあるが、それだけで母親に伝わるわけではない。グループ活動や個別指導で担当者が子どもと実際にかかわり、ことばをかけているところをモデルとして母親に示し、そのかかわりやことばかけの意図を随時母親に説明することも必要である。このような担当者から子どもへのかかわりやことばかけがあつて、母親が「週の記録」のコメントを理解し、生活の中で取り組むことにつながるものとする。

（４）ことばの理解と表出

母親の不安や疑問が含まれた記述で「ことば」の「理解」と「表出」に関するものが支援開始後13ヶ月以降に増加していくことが表7で示されている。これは子どもの成長に応じて少しずつことばでのやりとりが母子の間でできるようになってくるためであるとする。「ことばかけ」同様、「理解」と「表出」についても子どもの年齢によって母親の記述の内容や担当者のコメントに違いが見られる。先に「理解」に関する母親の不安や疑問が含まれた記述と担当者のコメントを示す。

A児の母親の記述（1歳10ヶ月）

お姉ちゃんとおそろいの服を着せた時に「一緒だねー」と言って「一緒」の手話をやっていたら、それぞれの服を指さして「一緒」の手話を嬉しそうにやります。ただこれは、同じ服じゃなくても、例えば自分の服と母の服を指差してやったり、靴下と母の靴下を指差してからやったりするので、「同じ」という意味で伝わっているかどうかは分かりません。

担当者のコメント

自発的に出すサインが「可愛い！」と感じながら接することで、意味が後付けされていくこともあります。意味を知らせるには、「教える」よりも「楽しくかかわる」ことのほうが有効ですね。

E児の母親の記述（2歳4ヶ月）

「雨」と「傘」がごっちゃになっています。

担当者のコメント

雨が降ると傘が必要になるイメージがよくできていますね。「パパの傘」「ママの傘」などと遊びながらやり取りをするのはどうでしょう。

A児の母親は子どもが手話の真似をすることをうれしく思いつつも、理解しているか不安になっている。聴覚に障害がある乳幼児に話しかけた際に、そのことばの意味をその場で理解させて使わせることは難しい。そのため担当者は生活の中で楽しくやりとりを繰り返すことで意味がわかっていくということをコメントしている。

E児の母親の記述はことばの理解についてのものである。子どもは「雨」と「傘」が頭の中で混同してしまうということはよくあることである。ことばを覚えてたての子どもは「いぬ」ということばで象も牛も猫も表現することがある。そのため、これからことばを獲得していく過程の通過点と考えればE児の姿は何も問題のないものである。担当者はそのことを理解しているため、「雨が降ると傘が必要になるイメージがよくできていますね。」とE児の姿を認め、具体的なアドバイスをしている。

次に母親の不安や疑問が含まれた「表出」に関する記述を示す。

C児の母親の記述（1歳11ヶ月）

何か物を落とすと「ママおちたー」と教えてくれ、もう一度落とすと「またおちたー」と「また」が言えたのがすごいなーと思いました。また、別の日には動いている洗たく機を見て「パパみて」と指さし「ぐるぐる」と伝えていました。二語からさらに一語言うことが少しずつ増えてきて説明するようになってきました。今まで貯めてきた“ことば”が少しずつあふれてきて嬉しい毎日です。その反面、ゴニョゴニョ言っていることが多くなり私に話しかけてくれるのですが、何を言っているのかわかってあげられないことが増えてきました。

担当者のコメント

大好きな、パパ、ママとのやりとりを楽しめるようになりました。やった～！！ ゴニョゴニョ。モニョモニョ。お話をする意欲があることがよく表現されています。パパ、ママの少し大きめ、ハリのある声で話しかけてあげると、また聞き溜め、言葉として次々とあふれでてきます。

A児の母親の記述（3歳1ヶ月）

まだ、A児が何を言っているのかわからない時があります。

担当者のコメント

そうですね。全くわからない・・・という時もありますが、できる限り、わかろうとする努力をしてあげて下さい。そうすることで、A児くんも、もっとわかってほしいと、どんどん話してくると思います。

C児の母親の記述は、話すことばが増えてきていることに喜びつつ、C児のゴニョゴニョ話すことがわかってあげられないことを気にしている様子である。C児のようにゴニョゴニョ話すことはジャーゴンといい、幼児期によく見られるものである。子どもとしては大人と同じようにおしゃべりしているつもりになっているのである。担当者はその姿を認め、やりとりの中で改めて話しかけ方に注意するようにアドバイスしている。A児の母親の記述の場合、「まだ」と書き出していることから、おおよそはA児の話していることはわかるのだが、時々わからない時があると

解釈できる。子どもは「ママは僕の言うことはわかってくれる」と自信をもっているものである。乳幼児教育相談の段階では子どものその自信を大切にしたいと考える。そのため、担当者は母親に「わかろうとする努力をしてあげてください。」とアドバイスしている。

「ことば」に関して、乳幼児教育相談に通ってきている母親の意識は高い。そのため、支援を受け始めてからも子どもの成長に応じて母親一人一人が悩み、迷うことが多いようである。母親が抱えている「ことば」に関する悩みについて話を聞いていると、母親からことばの指導をしてほしいという希望が出てくる場合がある。担当者と子どもが向かい合って座り、絵カード等を使ってことばを覚えるという指導をイメージしての発言である。そのような母親には次のようなことを説明している。

- ・ 0歳、1歳、2歳の子どもにとって、絵カード等を使ってことばを覚えるということは、発達の面から考えてもそぐわないこと。
- ・ ことばを覚えたとしても、そのことばを使って伝えたい、わかりたい、という気持ちが育っていないと、やりとりの中でことばを使うことはできないこと。
- ・ 幼い時期の子どもは、安心できる母親との心地よいやりとりの中でことばを獲得していく。まずは子どもとわかり合うやりとりを心がけること。

しかし、このように説明されても、母親は子どものことばの成長を実感できるわけではない。根気強く子どもとやりとりを重ねていくことが必要になる。子どもと母親が笑顔でやりとりをしている場面や、母親が伝えようとしたことが子どもにしっかり伝わった場面を担当者が見かけた時等は、その母親の努力を認め、母親を誉めるようにすることも大切な支援の一つであると考え。母親は大人ではあるが自分の行為や努力を認めてほしいと思っている。そのことを理解した上で、日頃の支援を行っていく必要があると考える。

母親がもつ「ことば」に関する不安や疑問に対して、担当者としては的確に応じられるようにしたいものである。そのためには、乳幼児期から幼児期にかけての子どものことばの発達について研修を深め、学んだことを日頃の活動の中での子どもの姿と照らし合わせて理解していくことが必要になると考える。

3 子どもの聴力によって抱きやすい不安や疑問に違いがあるのか

子どもの聴力によって、母親の不安や疑問が含まれた記述の数に大きな違いは見られなかった。しかし、B児とF児の母親が「手話」に関する記述をしていた。その内容は次の通りである。

B児の母親の記述（0歳5ヶ月）

聴力の重さからいって必要になるものと思い、手話入門講座に通い始めました。

担当者のコメント

色々な人からたくさんのお話をきけるいい機会ですね。

F児の母親の記述（1歳2ヶ月）

手話でろう者とコミュニケーションを図れば世界が広がるだろうなと思う反面、口話が育たなくなるのかな・・・と思ったり。先生のご意見を聞かせてください。

担当者のコメント

手話は話し言語を獲得するためには注意して使用しなければなりません。（意味を理解させるためには有効です。）しかし、コミュニケーション手段としては便利です。

支援開始時の聴力はB児が 102dB、F児が 93dB であった。自分の子どもの聴力は重いと感じた母親が手話の必要性を考えたものと推測される。本校乳幼は聴覚口話法による言語獲得を目指して支援を行っている。しかし、乳幼児の時期に話し言葉だけで母子のやりとりを成立させることは難しい。そのため、子どもとやりとりをする際、母親たちに写真カードや絵カード、身振りや手話単語等子どもが目で見えてわかりやすい手段を使うことを勧めている。また、両親も聴覚に障害があるデフファミリーの子どももいる。デフファミリーの家庭では手話でのコミュニケーションを行っていることが多い。聴覚に障害がある乳幼児に話しかける際、写真カードや身振り、手話単語等の視覚的な補助手段を活用することは大切なことである。

4 子どもが装用する補聴機器によって違いがみえてくるのか

「聴覚」の記述の中に「補聴器」に関する記述、「聞こえ」に関する記述とともに「人工内耳」に関する記述も見られた。表3を見るとB児、D児、E児、F児の母親の記述であった。B児、E児、F児の母親の人工内耳に関する不安や疑問の記述は装用習慣に関するものが多かった。装用習慣に関する記述は「補聴器」に関する記述の中にもあり、子どもが装用する補聴機器による違いは見られなかったと考える。人工内耳の装用習慣に対する支援については、本章の2の（1）補聴器、人工内耳の装用習慣の所で既に述べた。ここでは人工内耳を装用していないD児の母親の記述を取り上げる。

D児の母親の記述（1歳6ヶ月）

次回、人工内耳について病院の意見を聞かせてくださるとのことです。

担当者のコメント

おおよそわかりました。また個別の時にじっくり聞かせてください。

聴覚に障害のある子どもが人工内耳を装用ということは、その子どもの聞こえを補償する選択肢の一つとして珍しいものではなくなっている。しかし、実際に耳鼻科医から人工内耳の装用について提案された時、手術をするべきかどうか迷う母親がいる。人工内耳を装用することによる効果について理解していても、我が子が手術を受けるということに抵抗を感じる母親は少なくない。D児の母親も人工内耳の装用について消極的な考えをもっていた。そのような母親とやりとりをする場合、担当者は母親の人工内耳に対する不安や疑問に真摯に対応していくことが必要であると考え。そのため上記のコメントを記入した担当者は、「週の記録」上の紙面での

やりとりではなく、個別的に話し合うことを優先させたものとする。本校乳幼の担当者は、実際に人工内耳について母親と個別的に話し合う中で、担当者は母親の人工内耳に対する不安や疑問、迷いを受けとめるようにしている。基本的に母親の質問に答える形で、人工内耳を装用することで見られる効果や実際に生じる生活上の制限について説明している。母親たちはインターネット等を通じて人工内耳の情報を得た上で質問してくることが多い。そのため担当者は耳鼻科医から直接得た情報や、過去に担当したことがある人工内耳を装用した子どもの姿やその母親と話し合った事柄等をもとに説明するようにしている。人工内耳を装用した場合、補聴器を装用していた時よりも音や音声に対する反応が良くなることが多い。だが、人工内耳を装用しても健聴者と同じ聞こえになるわけではないこと、人工内耳を通して入ってくる情報は補聴器と同様に、曖昧なものであること、そのため補聴器を装用している子どもと接するのと同じように視覚的な手がかりを活用しながら確実なコミュニケーションを心がける必要があることについても説明するようにしている。

第5章 まとめと今後の課題

本校乳幼では聴覚に障害がある0歳から2歳の子どもと母親に対して支援を行っている。担当者に積極的に働きかけてくる子どももいれば、引っ込み思案な子どももあり、子どもたちの個性は様々である。これは母親たちも同様であり、積極的に担当者に質問する母親もいれば、担当者からの話しかけを待っている母親もいる。今回の研究で取り上げた「週の記録」においても、母親の個性が表れている。仕事をしていても毎週必ず記録を提出する母親もいれば、文章を書くことが苦手で提出が滞りがちな母親もいる。子どもの気になるところを書くことが多い母親もいれば、子どもの成長したところを多く書いてくる母親もいる。このような様々な個性をもつ母親が提出した「週の記録」の中に、母親の不安や疑問が含まれた記述があり、今回はそれらの記述を0歳児の時期から2歳児の時期まで縦断的に検討することができた。今西ら(1981)の報告では、2歳児の母親の質問に限られていたが、母親がもつ不安や疑問について本研究では縦断的に幅広く検討することができたことは意義があったと考える。

ここで年度末に作成している文集に掲載されたE児の母親の記述を紹介する。1つ目は0歳児期の年度末、2つ目は1歳児期の年度末に書かれたものである。

かわいくてかわいくて、ただただかわいいので、E児が聴こえにくい子だという事をよく忘れてしまいます。と、けやき（本校乳幼）にて先生に伝えると「それで良いのです」とおっしゃられました。母親がニコニコと笑顔で側にいる事が一番大事なのだと。小児難聴外来への紹介状を手に里帰りから戻った私は焦りばかりが募り途方に暮れていました。そのような時、けやきでの先生方の言葉と対応には安堵させられました。少し特別だけと特別な事はないと合点し、自信を持ってこの子の側にいて良いのだと思いました。そして一年が過ぎました。～略～

～略～今日、他のママの去年の文集を読み返しました。「言葉を教え込むのではなく心を合わせる事。言葉を育てる場所ではなく、人を育てる場所」いつもけやきで教わっている事なのに…。最近忘れがちでした。来年度も、急がば回れ。E児の事をきちんと見ながら、急かす事なく、時には粘り強くゆったりと見守っていきたいです。

E児が新生児聴覚スクリーニングで **refer** との結果を受け、大きな不安と焦りがあった様子が読み取れる。しかし、本校乳幼で支援を受けたことにより、不安や焦りは薄れてゆき、我が子の姿を認め、前向きに育児に取り組むようになった様子がうかがえる。本研究で取り上げた母親のもつ不安や疑問は、実際に日々母親たちが生活の中で抱えている不安や疑問のごく一部かもしれない。今回は母親が抱く不安や疑問を含む記述と担当者のコメントを紹介したが、担当者のコメントを見てみると、母親の記述に対して否定的なものは見当たらなかった。担当者が母親の気づきや不安、迷い、疑問を肯定的に受けとめ、認めているためである。これは特別支援学校（聴覚障害）の乳幼児教育相談において母親への支援を行う際の基本であると考えられる。本校乳幼がおよそ40年前から母親支援で大切にしてきたことを改めて認識することができた。母親が「週の記録」に書いていることに担当者はコメントを記入しているが、記入するスペースが限られているため、書き切れないことがある。そのような場合、佐藤（2014）が報告したように、紙面でのやりとりではなく、実際に顔を合わせて話し合うことが必要になる。そのため、個別指導の時間やグルー

プ活動の合間等に母親と口頭でやりとりをして、アドバイスをし、質問に答えるようにしている。このように、母親を支援していくために様々な場面や方法で担当者は母親とやりとりを行っている。E児の母親のように、不安や疑問をもつ母親が前向きに育児に取り組めるよう支援していくために、今回取り上げたような支援の方法は今後も継続されていく必要があると考える。

今回の研究で、担当者から母親への支援だけではなく、聴覚に障害がある子どもの家族全体に対する支援の必要性についても考える機会となった。また、人工内耳の普及や仕事に就く母親が増えてきたことで、医療機関や保育所等外部機関との連携の大切さについても再認識することができた。これらのことも含めて、今後の母親支援、家族支援のあり方について考えていきたい。

引用文献

- 1) 聴覚障害者教育福祉協会 (1979) : 聾教育百年のあゆみ、財団法人聴覚障害者教育福祉協会、201
- 2) 文部科学省 (2016) : 特別支援学校幼稚部教育要領小学部・中学部学習指導要領、文部科学省、22
- 3) 今西茂子・富田香織 (1981) : 乳幼児を育てる母親が抱える問題－質問から見た傾向と指導のあり方－、筑波大学附属聾学校紀要、第3巻、83-97
- 4) 愛甲洋編 (1989) : 0・1・2歳児の指導－お母さんへのテキスト－、聾教育研究会、6
- 5) 佐藤幸子 (2014) : コミュニケーション力を育てる母親支援～週の記録を通して～、筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要、第36巻 (通巻41巻)、8-9
- 6) 原島恒夫・吉野賢吾・太田康子 (2018) : 米国における聴覚口話法教育－人工内耳とインクルーシブ教育の流れの中で－、聴覚障害、第73巻夏号 (通巻774号)、ジアース教育新社、54-59

参考文献

- 1) 公益財団法人聴覚障害者福祉協会聴覚障害乳幼児教育相談研究委員会 (2018) : 聴覚障害乳幼児の教育相談指導の現状と課題－特別支援学校 (聴覚) における教育相談の実態調査からその在り方を展望する－、聴覚障害乳幼児教育相談研究委員会
- 2) 手塚清・森敬子 (2018) : 乳幼児教育相談における母親の気持ちの変化、筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要、第40巻 (通巻45巻)、10-13
- 3) 筑波大学附属聾学校幼稚部 (2004) : 幼稚部3年間の子どもの姿、聾教育研究会
- 4) 筑波大学附属聴覚特別支援学校幼稚部 (2011) : 幼稚部教育課程 (0～5歳児) 平成23年、聾教育研究会
- 5) 森敬子・手塚清・佐藤輝子 (2018) : 乳幼児教育相談における母親の気持ちの変容に合わせた支援～週の記録を通して～、第52回全日本聾教育研究大会北海道大会研究集録、14-15
- 6) 宇野宏之祐・横倉久・山本晃他 (2018) : 聴覚障害教育におけるセンタ－的機能の充実に関する調査研究～「予備的研究」から乳幼児教育相談に焦点を当てた「基幹研究」へ～、第52回全日本聾教育研究大会北海道大会研究集録、10-11

参考 WEB サイト

- 1) 日本産婦人科医会 母子保健部会 (2017) : 新生児聴覚スクリーニング検査に関するアンケート調査報告、〈<http://jaog.or.jp/wp/wp-content/uploads/2017/09/2017hearing.pdf>〉、2018年4月11日閲覧

謝 辞

この度、このような研究の機会を与えてくださり、研究助成をいただいた公益財団法人みずほ教育福祉財団様に深くお礼申し上げます。

そして、本研究を行うにあたり、「週の記録」の使用を快く承諾いただいた保護者と文集の記述の掲載を承諾いただいた保護者の皆様に心からお礼申し上げます。

また、本研究をまとめるにあたり、計画段階から多大なるご指導、ご助言をいただいた独立行政法人国立特別支援教育総合研究所研究企画部総括研究員の山本晃先生に心から感謝申し上げます。

聴覚に障害がある乳幼児の母親が前向きに子どもとかかわり、そのかかわりが子どものよりよい育ちにつながります。そのために必要な具体的支援について、本研究を通して改めて考え、日頃の本校乳幼担当教員の支援を見直すことができました。

近年、聴覚障害乳幼児教育相談研究委員会や独立行政法人国立特別支援教育総合研究所が行った、全国の特別支援学校（聴覚障害）を対象にした調査の報告がされています。それらの報告から、現在の特別支援学校（聴覚障害）の乳幼児教育相談をとりまく様々な課題が見えてきます。本研究が今後の特別支援学校（聴覚障害）の乳幼児教育相談に行われる支援に対して、何らかの形で寄与することにつながれば幸いです。